

「地域住民による小学校存続のための住環境提供の試み・第2回」

三次市青河町ブルーリバーの取り組み

石垣 文

広島大学大学院工学研究院 助教

1. はじめに

中国地方の過疎が進む地域にて、小学校存続に向けた住民活動として、今回は広島県三次市青河町の有限会社ブルーリバーを取りあげる。

2. 青河町の概要と教育環境

青河町は広島県三次市の中心部の南にあり、501人、185世帯(2011年10月現在)が暮らし、60歳以上が45%を占める地区である。市の中心部へは車で10分、そこから広島市へは一時間のため通勤通学も可能な立地である(図1)。

青河小学校(写真1)が立地するのは、コミュニティセンター(写真2)、簡易郵便局、小売店、神社や寺院もある地域の中心部である。中学校は青河町にはなく、隣の川地地区に立地する。三次市では住所地による通学区域の制度を維持しながら、小・中学校の通学区域自由化も導入してきた。さらに現在、各町単位のコミュニティを崩さぬよう統廃合の人数基準は撤廃し、少なくとも中学校単位では各地域に学校を残すこととしている。保育所は以前から青河町には設置されておらず、住民は周辺地域のものを利用してきている。

青河小学校は、児童21名、教職員7名、三学級(2011年4月)から構成される。地域との合同運動会をはじめ、日々の教育活動に地域住民が加わること約30年を数えるが、さらに、お年寄りと子どもが関わりをもつ「地域の里親制度」を設けるなど、子どもが地域住民と気軽に声をかけあえる関係を築いてきた。

3. ブルーリバーの設立経緯

周辺町村との合併論議や学校統廃合議論が本格化した2001年頃、青河町では児童数30名ほどに減少した小学校の統廃合など町の将来に対する危機感が漂っていた。そこで地域の活性化のために小学校を残したいと考えた住民が活動を始めた。手始めに行った青河の出身者への

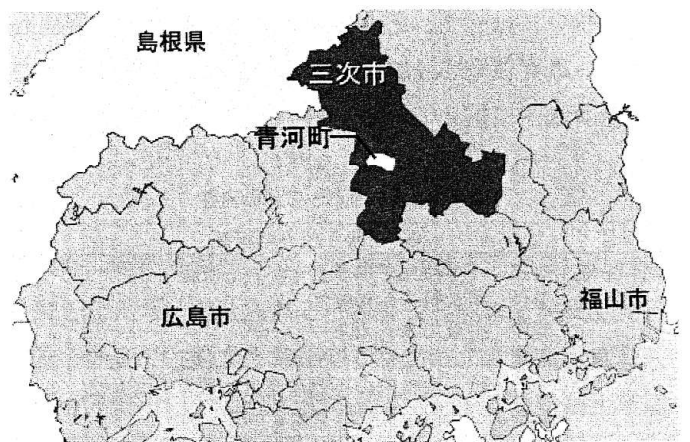


図1 三次市青河町の位置



写真1 青河小学校外観

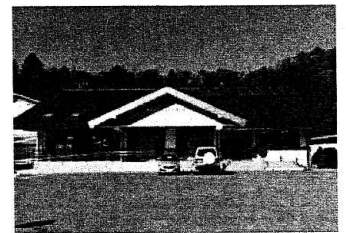


写真2 青河コミュニティセンター外観

Uターンの呼びかけは、しかし頓挫した。そこで、地域の価値観を高めて新たな住民を募ることを目標に活動を本格化させることとなった。活動主旨に賛同した9名自らが、それぞれ100万円ずつの出資金を出して有限会社ブルーリバーを設立したのは2002年6月のことである。出資者はみな青河の住民であり、メンバーの年齢は40歳代から80歳代と幅広い。

4. ブルーリバーの活動内容と特色

具体的な活動内容としては、「賃貸住宅の建設」と「既存住宅のリフォーム」が挙げられる(表1)。賃貸住宅の建設においては、誰もが住みたくするような住宅を目指して電化設備なども充実させながらも、ローコストに抑える工夫をしている(写真3)。国道沿いで交通の便が良い場所に立地しており、1, 2号棟は2003年春に入

居が始められた。現在7戸は同じ地区内に建てられている。ブルーリバーの活動が新聞でも報じられると、旧住民からの住宅の寄贈も行われ、既存住宅のリフォーム物件提供へとつながった。

住宅への入居は、基本的には小学生以下の子どもがいる家庭が対象であり、学校や町の行事への参加など最低限の付き合いも求めるといった一定の制限がある。入居者は広島県内の各地、また関東地方に及び、これまで7件の新築と3件の改修が行われた。転入希望者へは三次市定住促進事業からの広報もされているが、公営住宅といった扱いにはせず、あくまで私的な事業として展開してきた。既存住宅のリフォームもメンバーが主に行うことで低コストに抑えている。

表1 ブルーリバーの活動内容

項目	取り組みの詳細
賃貸住宅の建設	対象：小学生以下の子どもがいる家庭 条件：町の行事への参加 規模：戸建て3～4DK 家賃：市内中心部の相場より低く設定しており、契約は三次市内の不動産業者へ委託している これまで一棟が買い取りとなった
既存住宅のリフォーム	簡易水洗便所、希望によりオール電化の設備をつけ、内装工事を行う。

新規住民の多くは共働きのため、子育ては近隣住民が支援している。また、小学校隣地のコミュニティセンターには青河自治振興会が運営する放課後児童クラブが設置されている。小学校1～3年生が対象だが、6年生までが利用でき、時間延長も可能といった融通のきいた対応をしている。

こうした活動を行うブルーリバーであるが、特色としては三つの点が挙げられる。まず、新規住民の迎え入れのために住宅の新築と既存住宅のリフォームの双方を行う点である。このことにより、空き家の活用のみを行うよりは多様なニーズに応えられるのではないだろうか。また、空き家の提供がなくとも事業を継続させることが可能となっている。次に、活動メンバーに建設業に携わ

る者がいることが挙げられる。これにより住宅のローコスト化やリフォーム技術の提供を行うことができた。最後に、青河町には住民活動の場としてコミュニティセンターが整備されている点も見逃せない。これは公民館の建て替え（2006年）による施設であるが、喫茶店もない町では住民がふらりと訪れ立ち話をできるような、憩いの場となっている。ここで過ごすことで、住民間での様々な情報も共有され、ブルーリバーの活動へのアイデアへもつながっている。

5. 学校存続活動の効果と今後の課題

ブルーリバーの活動が始まり、小学校では29名のうち11名をブルーリバーの子どもが占めるに至った（2010年度）。全児童数は25名（2002年）から31名（2005年）に増加し、今後も20名台を維持する見通しである。青河から市の中心部にある児童数の多い小学校へ通学する家庭も見られるが、小規模校であることを評価した転入は継続してみられ、学校の存続に効果があったと言える。さらに、保護者を含めたブルーリバー住民は青河町の1割を占めるほどになり、そのうち2世帯が自分たちの住宅を建設した。こうした活動が評価され2011年には「第2回地域再生大賞」^{注)}にもノミネートされている。

これまで10戸の建設・リフォームに取り組んできたブルーリバーは現在、総戸数を20戸程度まで伸ばしたいと考えている。また、コミュニティへの影響を考え、今後は建設地を町内に分散させ、各地域で新規住民と地元住民との関係を築けるよう配慮している。2010年からは空き家の修繕・斡旋事業を開始しており、また地域産品の販売拡大を目指した観光バスのワンストップステーションも計画している。新規住民は若年ファミリー層だけにこだわってはいない。法的な難しさもあるものの、多様な世帯を呼び込むための農地の活用も視野に入れ、長期的なスパンで計画を考えている。町にはブルーリバーの他にも、暮らしサポート車両の運行や都市部との交流事業に取り組む団体もあり、持続的な居住環境の構築活動として今後の動きも注目される。



写真3 新築の賃貸住宅

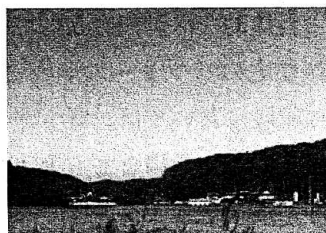


写真4 周辺の風景

注) 地域活性化に取り組む団体を支援するために全国の地方新聞社と共同通信社が創設した賞である。 <http://www.47news.jp/localnews/chiikisaisei/taisho/>

参考文献

「学校近くに住宅整備 住民出資会社「ブルーリバー」」 中国新聞 2010年5月15日